



6月に行われた、「小学部授業研究会」の話題についてお伝えします。

### 全校授業研究会 小学部

小学部あおば エンジョイタイム みえないちからでうごかそう

〈わかはとモデルより、特に高めたい要素〉

#### 【好奇心】

- ・導入での教師の手本を見て「やりたい」「もう一回やって」と伝えたり手を伸ばして触ろうとしたり、じーっと見たりする姿
- ・活動が始まるとすぐおもちゃを手にとって活動する姿
- ・休み時間に、風やゴムを使って遊ぶ姿

#### 【試す】

- ・風の強さやゴムの太さなどを変えて何度もやってみる姿
- ・うまくいかないときにやり方を変えてやってみる姿
- ・「こうするとどうなるかな」などいろいろな試してみる姿



〈授業者のしかけ〉

様々なゴムの力を試すことができるように、着脱できるゴムを用意した。



#### 【児童の様子】

- ・4種類のゴムを見比べて、自分で選んだゴムでの的当てをした。
- ・遊んでいてゴムが外れたときに、友達や教師の使っているゴムの色に注目して、新しいゴムを選んだ。



〈授業者のしかけ〉

ゴムの力を使ったおもちゃの楽しさを感じられるように、全員で「ゴムロケット」に触れる機会を設定した。



#### 【児童の様子】

- ・友達が「ロケット」を飛ばす様子をよく見ていた。
- ・「ゴムロケット」の飛ばし方が分かり、自分でやってみようとしていた。
- ・「2チームでやりたい」など、アイデアが膨らんだ児童もいた。



【ロケットを引っ張る強さを試す】



【ゴムの感触を繰り返してじっくり楽しむ】

ときどき	わくわく
うまくできるかな	やったー
くやしい	うまくできた
どうして?	もっとやりたい

【振り返りで使用した「気持ちを表す言葉」】

授業でめざしたい児童	【好奇心】ときどき わくわく	【試す】やってみよう
凡例	友達の様子を見て自分もやってみよう 友達を惹きつける態度の引き出し	自分の道具をずっと手に持っている これまでの振り返りから今の日の学習を楽しくする
児童の姿	友達を惹きつける態度の引き出し 歌などより意識を向けられる仕掛け	自分の道具をずっと手に持っている 自分から発音するモノに手を伸ばす
児童の姿を引き出した支援	友達を惹きつける態度の引き出し 歌などより意識を向けられる仕掛け	自分の道具をずっと手に持っている 自分から発音するモノに手を伸ばす
より膨らませるための支援	友達を惹きつける態度の引き出し 歌などより意識を向けられる仕掛け	自分の道具をずっと手に持っている 自分から発音するモノに手を伸ばす
高めのキーワード	教材の工夫は興味・関心の入口 試行錯誤する機会が好奇心へ	やってみたくなる教材の仕掛け ヒトを通じての興味・関心や試行錯誤

【協議で話題になった内容 改善点】

- ・ どうしたら倒せるか、倒れなくて悔しいなど、児童が考える場面を増やすために、倒しにくい的を作ったり、的までの距離を変えたりする。
- ・ 活動の合間にまとめの時間を取り、また活動するなど柔軟な時間の使い方でもよいのではないか。

## 研究協力者の先生から

### 〈秋田大学教育文化学部准教授 鈴木徹先生〉

- ・ 小学部段階で「生涯学習力」を育む段階で、いろいろなものに興味・関心を向けられるようにすることが大切である。児童の興味・関心の高まりは、教師が外側から広げていくものではなく、児童自身が内側から広げていくイメージである。児童が何に興味をもっているのかを見取ることが大切である。
- ・ モノに惹かれるポイントは、人によって異なる。素材であるのか、動きの変化なのか、モノそのものに惹かれているのか人それぞれである。同時に、楽しみ方もそれぞれ異なっており、モノに触れる、友達の様子を見るなど様々であり、それでよい。
- ・ 自分で活動に取り組む児童、教師を活動に誘う児童など、活動への取り組み方も人それぞれである。こちらの型にはめるのではなく、児童の型に合わせていくことが大切である。手先が不器用な児童でも一人でゴムを操作できる工夫があると、もっとモノに没頭できるのではないだろうか。
- ・ モノとの関わりの「深まり」と「広がり」について。モノとの関わりの「広がり」は、ゴムの太さや的までの距離を考えること。モノとの関わりをじっくり深めることで気づきが深まる。「深まり」と「広がり」の2つの方向性があるので、児童の実態や状況に合わせて実施していくことが必要。

### 〈秋田大学大学院教授 武田篤先生〉

- ・ 小学部段階の生涯学習力の育成において、教師が着目すべきは「意思決定支援」である。本人が選び、決定していく主体性が、彼らのウェルビューイングにつながる。絵カードやVOCAなど児童が決定できる支援を充実させることが必要。教育現場で決定の機会を重ねることで、社会に出てからの生活がよりよくなる。本人がやりたいことを表出できない場合、動画の2択から選択するなどの支援が有効である。保護者が表出できないと思っている場合もあるので、小さい時からの自己決定の支援が必要である。
- ・ 一人一人では発揮できないことを学ぶのが集団であり、一人では気付くことができないことに気付けるのが集団のよさである。実態差があるから学び合いが生まれる。集団を生かした授業づくりをしてほしい。

### 〈総合教育センター主任指導主事 北島英樹先生〉

- ・ 一人では難しいけれど、誰かと一緒ならできるかも、という感覚を育ててほしい。
- ・ 個人差を生かす授業は、関わりをつなぐ力を育む授業であり、教師が関わりを作り出すことが必要である。集団で学び合う中で、授業者が予想しない展開が生まれることがある。
- ・ 集団が目標を全員が意識することで、子どもたちの関わり合いにつながる。目標（テーマ）を共有する場面を作ってほしい。
- ・ トップダウンだけではなく、児童の実態の積み重ねからアプローチをしてほしい。今あるよさを積み重ねていく姿勢で、「目指す姿」だけが強調されないようにしてほしい。
- ・ 児童の実態が分かるような記述を。全員分ではなくとも、抽出児童についての記述があるとよい。
- ・ 繰り返しの活動で安心して学ぶことができる児童もいるので、授業時数や取り上げる題材の数の精選が必要ではないか。
- ・ 扱う題材やねらいが児童の発達段階に合っているかを確認してほしい（今回扱った内容は「理科」の中学部1段階に相当する）。